

平成28年度 学校法人皇學館・篠田学術振興基金助成研究

近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会 ニューズレター



研究交流会(東義大学校 伽耶キャンパス)

韓国・東義大学校にて研究交流

平成28年8月31日～9月2日の日程で、本研究会メンバー6名が大韓民国・釜山市東義大学校伽耶キャンパスで開催の研究交流会参加のため出張しました。

9月1日は午前中東義大学校人文学部で金仁鎬教授の研究グループとの間で相互の研究紹介と意見交換会、午後から釜山広域市立市民図書館にて資料調査を実施。

会を主催された金教授並びに訪韓を支えてくださったご関

係の皆様にあらためて感謝申し上げます。

なお、釜山訪問記は本ニューズレター第3号の別冊として刊行していますので、ご覧ください。



目次

第3号



韓国・東義大学校にて研究交流 1
平成28年度～30年度

新たな3か年のスタート ……1

第1回研究会開催 ……2

社会福祉関係の諸年表と年表
作成の意義

……宮城洋一郎 2



「連続」の視点からみた日本の
福祉原理の系譜

—井上友一における感化救済思想と
皇室の下賜との関係について—

……山路克文 3

近現代の学校をめぐる災害復旧
事業と防災教育

……岩瀬真寿美 3



【資料紹介】明治三十八年宮城県
遠田郡不動堂村における恩賜金
下賜にかかる係争関係資料

(承前) ……櫻井治男 4

活動報告 平成28年度 ……5

コラム ……5

出張報告 平成28年度 ……5

研究メンバー紹介 ……6

3年間の研究計画 ……6

編集後記 ……6



平成28年度～30年度 新たな3か年のスタート

本研究は、日本近代以降における社会事業・福祉活動の発展・展開を考究する上で、皇室の当該事業への関わりや果たした役割・意義を明らかにすることを目的とし、平成25年～27年度の3か年にわたり、篠田学術振興基金の研究助成を受け進めてきた研究を継続するとともに、これまでの成果を踏まえて研究の深化を図るものである。

我が国の社会福祉史において、光明皇后をはじめ孝謙天皇に仕えた和気広虫など皇室が慈善・救助活動に関与してきた歴史がある。この系譜は、近代を迎え欧米の社会事業との出会いにおいて、どのように展

開が図られてきたかを、現代における活動の連続・非連続の問題として理解することは、日本の福祉にかかる社会的・文化的背景の特質を明らかにする上で重要なテーマであるといえよう。

本研究が3年間で行う内容は次の3点に集約される。①皇室の災害時における支援活動にかかる基礎的研究資料の収集整理と資料編集②皇室の活動に対する宗教団体・組織(神道・仏教・キリスト教)の関わり実態③災害支援の理念・活動が宗教メディア及び学校教育において如何に発信され国家・皇室・宗教観に関わったかを明らかにする。

第1回研究会開催

第1回研究会

(平成28年8月9日(火)13:00～17:00)

於 皇學館大学9号館5階 大会議室

- ① 【代表挨拶】新田均
- ② 【報告】「平成25～27年度篠田学術振興基金助成研究について」
- ③ 【発表】宮城洋一郎「社会福祉関係の諸年表と年表作成の意義」
- ④ 【発表】山路克文「『連続』の視点からみた日本の福祉原理の系譜：井上友一における感化救済思想と皇室の下賜との関係について」
- ⑤ 【発表】岩瀬真寿美「近現代の学校をめぐる災害復旧事業と防災教育」
- ⑥ 会員情報交換会
- ⑦ 【報告】「平成28年度以降の篠田学術振興基金助成研究にかかる報告」



平成28年度第1回研究会（皇學館大学9号館5階 大会議室）

社会福祉関係の諸年表と 年表作成の意義

宮城 洋一郎^{*1}

本研究会では、これまでに『恩賜録』所載の災害救助に関わる恩賜金の年表作成作業を行ってきた。この作業は、本研究会の協力者である岡本和真氏、魚岸一弥氏、金田伊代氏らの献身的なご尽力により進められてきた。この作業をふまえて今後の調査研究の方向性を考えるために、年表作成のための議論を提起したい。

私は、社会福祉法制史に関わる年表作成に関わってきた。その関わりの中から、年表の持つ意義を、① 時系列での理解を促す役割、② 関連項目の設定により同時期の動向を把握していく意義の二つがあると気づかされた。

皇室の災害時の恩賜金配付および各種の慈善事業団体への恩賜金助成など、皇室の慈善事業・社会事業等への深い関わりをまとめた『恩賜録』は、こうした事項だけではなく広範囲に及ぶ恩賜金に関する資料を収録している。

その『恩賜録』を典拠にした年表作成には、『恩賜録』が有する史的意義を踏まえ、さらに同時期の政治・社会等の動向と重ね合わせていく必要があるかと思う。

これまでの作業では、『恩賜録』巻頭の目次を項目として記述し、恩賜金、御救恤金などの名称、金額、侍従派遣の有無、出典（『恩賜録』の年次、巻数）等を明記してきた。これにより災害地、災害の規模、恩賜金額等を一瞥できるようになった。そこで、年表作成へと向かうために、『恩賜録』所載の各種資料（知事からの礼状、恩賜金の配布状況報告書等）をどう表記するか、また、政治・社会の動向をどう関わらせていくか、さらにはこの分野での先行研究である遠藤興一氏が提示したところとの比較検討をどう進めるかの課題がある。

こうした問題点から私見では、まず明治期の一時期を抽出して、可能な範囲で年表作成にあたってみて、ひとつの試案を提起して、議論を深めることを提案したい。

「連続」の視点からみた日本の 福祉原理の系譜

—井上友一における感化救済思想と皇室
の下賜との関係について—

山路 克文*2

今回の報告は、社会福祉の近現代史研究のなかで、重要な位置にある井上友一らの感化救済思想と皇室の御下賜金との関係を明らかにすることを目的として報告を行った。とくに指摘を受けた井上友一の先行研究の考察については別の機会に取り組んでみたいと考えている。

報告者は、日本の社会福祉制度・政策史に関する研究を続けているが、その中でもとくにGHQの占領政策に関心がある。いわゆる SCAPIN775 のタイトルの訳を廻る謎を手がかりに、なぜ公的扶助と訳さず「社会救済」と訳したかについては、謎というより意図的に訳されたのではないかという仮説を立て、明治以降の日本の貧困救済諸施策の基本的考え方の変遷に関心を寄せている。

今回の報告は、天皇・皇室による慈恵事業とその時々政府の政策理念(思想)との関係を明らかにするために、明治期後期に登場する「感化救済事業」に焦点を絞りその指導的役割を果たした井上友一の人と業績、報告では合わせて感化救済思想を牽引した床次竹次郎・潮 恵之助の史料にも若干触れた。

井上友一は、彼の大著「救済制度要義」(1909(明治42)年博文館)のなかで、彼の思想を表す有名な一文がある。「夫れ救貧は末にして防貧は本なり。防貧は委にして風化は源なり。詳言せば救貧なり防貧なり苟しくも其本旨を達せんと欲せば必ずや先ず其力を社会的風気の善導に効さざるべからず。国家及社会の発達のために精神的関係及経済的關係に於て、総ての階級を通じ其地位を高からしむるにあり」

土井洋一は、彼の思想を「救済の指導理念は、消極的救済活動によって代位させ、物質的援助に精神的援助をもって代替させる政策の転換の過程で一層觀念化され、現実の国民生活改善に果す具体的効果をさらに弱めていった。」と評している(注)。

井上は、同著で「此の如く皇室の下賜に基く地方救済資金(慈恵救済資金蓄積制度)創設の沿革は宇内に於て他に事例を見ざる所なり。」と述べ御下賜金に期待も寄せている。

以上、報告の一部を紹介した。報告者が危惧する一点として、今日の不安定な世界情勢に向けた国の準備が、社会保障をして「自助、互助、共助、公助」という序列を国民に浸透させている。

感化救済思想とその歴史的背景に酷似した状況のように感じるのは、報告者の勝手な思い込みであることを願いたい。

(注)土井洋一「9 救済の抑制と国民の感化」(右田高澤・古川編著「社会福祉の歴史」1977 有斐閣選書)

近現代の学校をめぐる災害復旧 事業と防災教育

岩瀬 真寿美*3

皇室福祉研究会に参加させていただく中で、本研究会のテーマがこれまで自身が研究してきた仏教の人間形成理論の道德教育への応用というテーマといかにつながって考えられるか模索してきた。今回、教育という視点において震災はどう位置付けられるのか、特に徳育の面から深めてみたいと考え、「近現代の学校をめぐる災害復旧事業と防災教育」をテーマとして発表に応募した。平成22年度版以降大きく特集が組まれ続けている東日本大震災の時期とそれ以前の、阪神・淡路大震災後の防災教育に焦点を当てることとした。発表では、復旧と復興、ほんとうのさいわい、教職員の負担軽減と地域のネットワークづくり、心のケアと防災教育の一体化、学校からのまちづくり、終戦後から2007(平成19)年までの防災教育展開の課題とこれからの防災教育、防災教育副読本の作成、教員のメンタルヘルスという8つの視点を整理した。教育という視点において震災はどう位置付けられるのか、特に徳育の面から深めてみたいと考えたことが始まりであったが、地域によって防災教育の取り組みへの力の入れ方が異なること、震災の被害にあった地域においては防災教育の教材が整備されていること、他地域はそれらの教材を積極的に使うことが求められること、教育課程について言えば、防災教育の強化という意味で、復旧だけでなく復興が求められること、震災や防災をテーマは学校の教材の中でどう描かれてきたか等(「稲むらの火」は英雄談。1854年11月5日、広村(現和歌山県広川町)が安政南海地震による津波に襲われた際、濱口梧陵が稲むらに火をつけ、大津波から村人の命を救った実話。現代では道徳的に感動的な話やいい話を提示するだけでは防災教育として充分ではないという視点がある)、自身の今後の研究に活かせるであろう視点をいくつか得ることができた。

*2 皇學館大学 現代日本社会学部 教授

*3 名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部 准教授

資料紹介

明治三十八年宮城県遠田郡不動堂村における

恩賜金下賜にかかる係争関係資料(承前)

櫻井 治男*4

本会ニューズレター第二号(平成二十八年三月三十一日発行)において、宮城県立公文書館所蔵の「明治三十九年御下賜金関係書類」(請求番号・M39-0013)所収資料を翻刻したが、その節、関連資料二点が未紹介となり、ここに追補しておきたい。

【追補①】は、稟議と決済にかかる箇所から窺うと、文書作成は「三十九年三月廿二日」「課僚 属 高城畷造」で、課内及び「地方課長」、「第一部長」、「知事」(田井の丸印が押されている)の回覧を経て、発番「五〇五一」(朱書)、「三十九年三月廿三」(朱書)付という過程をとったようである。

【追補②】は「三十九年四月一日」に高城畷造が起案し、①と同様に回覧されたが(知事印は角印)、発番・日付を明確にし得ない。いずれにせよ、両資料は、前回紹介の【資料①】(三月十六日)と【資料②】(四月六日)の間に位置づけられるものである。翻刻にあたっては、資料に仮題をつけ、適宜読点を付したこと、前回同様である。

【資料・追補①】「不動堂村救助執行状況及御下賜金保管方法等回報の件」

遠田郡長へ照会案

貴郡不動堂村窮民一同ノ名義ヲ以テ、御下賜金配与ノ件ニ関シ別紙願書提出ノ処、右ハ郵便貯金ト為サシメ、村長ニ於テ相当保管ノ方法ヲ講シ居ルモノナルベクト被存候ニ付キ、義捐金品等ノ洽与及救済事業等ノ執行ニ依リ救助方法普及シ居ルニ於テハ一旦右支弗候ト被認候へ共、尚同村ニ於ケル救助執行ノ状況及御下賜金保管方法等詳細御回報相成度、此段及照会候也

年月日 部長

郡長宛

追々御回報ノ際ハ別紙御返付相成度申添候也

【資料・追補②】「不動堂村救助執行状況回報の件」

遠田郡長へ照会案

地第五〇五一号ヲ以テ及照会置候不動堂村救助執行ノ状況ニ関スル件、^(至急力)□□御回報成度、此段及照会候也

年月日

部長

郡長殿

なお、右の資料について、宮城洋一郎先生から次のようなコメントを頂いておりますので、一連の翻刻資料の理解の一助となればと思ひ要点的紹介を致します。

【追補①】の「洽」(翻刻ではママとルビを付しています)は、文意を勘案すると「給」と読むことができればいいが、原文書の筆跡では「糸」編には見えない。但し、起案者の高城の筆記癖から「糸」を「ン」と書いた可能性は捨てきれない。

「一旦右支弗候ト」の箇所について「支弗」と解読することで、文意は「義捐金品等が給与され、救済事業も執行されて、救助方法が普及しているの、一旦右支払(郵便貯金として)村長が通帳を保管している」と認められることではあるが、同村における救助執行、御下賜金の保管方法等の詳細を報告するように「と理解できるのではないか。」

【追補②】において、「至急」(翻刻では力としています)と推測すれば、この文書によって二度目の督促がなされたこと、四月六日付遠田郡長からの回答(前回翻刻・資料②)が寄せられたことがわかり、さらに、四月十四日付通牒(前回翻刻・資料③)において「疑念のないように」と県から釘をさされ決着となったのであろう。

活動報告 平成28年度

第1回研究会

(平成28年8月9日(火)13:00~17:00)

於 皇學館大学9号館5階大会議室

出席者:新田均、櫻井治男、田浦雅徳、山路克文、井上兼一、遠藤慶太、宮城洋一郎、室田保夫、冬月律、小平美香、岩瀬真寿美、岡本和真、魚岸一弥、金田伊代
本誌2頁参照。

学会発表・参加

平成28年5月14、15日に石巻専修大学(宮城県)で行われた「社会事業史学会第44回大会」にて宮城洋一郎が「明治38(1905)年東北地方大凶作と恩賜金について:宮城県における恩賜金配布を中心に」と題して研究発表を行った。

平成28年9月24日に明治神宮(東京都)で行われた「明治聖徳記念学会第61回例会」にて宮城洋一郎が「明治期の災害と恩賜金」と題して講演を行った。



石井十次 岡山孤児院発祥地



上阿知村の大師堂



コラム

岡山孤児院発祥の地を訪ねて

ニューズレター1号において、宮崎県児島郡木城町大字椎木にある石井十次資料館と墓地などが紹介されていますが、先般、石井が岡山孤児院創立のきっかけとなった「岡山孤児院発祥の地」を偶然訪れる機会があったので簡単に紹介します。

発祥の地は、岡山県邑久郡上阿知村(現、岡山市東区)で、石井が明治15(1882)年に岡山県医学校に入学後、同20年に病氣療養と医学実地研修のため当地へ転地していた節、寄留先の診療所に隣接する大師堂に身を寄せた母子三人連れの遍路と出会い、一子をあづかったことが始まりとされています。

掃除の行き届いた跡地と記念碑やお堂を拝見していると、通りがかりの方から「よく寄ってくれました、しっかり見て行ってください」と語りかけられ、地域の人々が大切にしておられることがうかがえました。

(櫻井記)

出張報告 平成28年度(平成28年4月~9月)

日程	場所	出張者	内容
平成28年 4月22日	皇學館大学 (三重県)	金田伊代	研究会打ち合わせ、資料調査
平成28年 5月14日~15日	石巻専修大学 (宮城県)	宮城洋一郎	社会事業史学会第44回大会参加 「明治38(1905)年東北地方大凶作と恩賜金について:宮城県における恩賜金配布を中心に」
平成28年 6月13日~14日	皇學館大学 (三重県)	岡本和真	海難事故発生に際する皇室の支援事業にかかる資料調査ならびに櫻井治男教授との意見交換のため

研究メンバー紹介(順不同)

研究代表者	新田 均	(皇學館大学 現代日本社会学部 教授)
共同研究者	櫻井 治男	(皇學館大学 文学部 特別教授)
共同研究者	田浦 雅徳	(皇學館大学 文学部 教授)
共同研究者	山路 克文	(皇學館大学 現代日本社会学部 教授)
共同研究者	鶴沼 憲晴	(皇學館大学 現代日本社会学部 教授)
共同研究者	井上 兼一	(皇學館大学 教育学部 准教授)
共同研究者	板井 正斉	(皇學館大学 教育開発センター 准教授)
共同研究者	遠藤 慶太	(皇學館大学 研究開発推進センター・史料編纂所 准教授)
研究協力者	宮城 洋一郎	(種智院大学 人文学部 特任教授)
研究協力者	藤本 頼生	(國學院大学 神道文化学部 准教授)
研究協力者	室田 保夫	(関西学院大学 人間福祉学部 教授)
研究協力者	冬月 律	(麗澤大学・公益財団法人モラロジー研究所 研究員)
研究協力者	小平 美香	(学習院大学 文学部 非常勤講師・天祖神社 禰宜)
研究協力者	岩瀬 真寿美	(名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部 准教授)
研究協力者	関根 英行	(嘉泉大学 人文学部 教授・大韓民国)
研究補助者	岡本 和真	(籠神社 権禰宜)
研究補助者	魚岸 一弥	(高瀬神社 出仕)
研究補助者	金田 伊代	(京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)
研究補助者	田中 天美	(射水神社 権禰宜)

3年間の研究計画

【初年度】(平成28年4月～29年3月)

- ①年度初の打合せ会・研究会で情報交換・研究推進のための役割確認と研究報告を行う。
- ②年度末の打合せ会において本年度の研究進捗報告・次年度の研究方向を確認し併せて研究会を開催する。
- ③研究資料の調査収集を実施しその分析と資料集編集に着手する。また日本統治下における朝鮮での状況を把握し資料収集に努める。
- ④数度の勉強会を開催する。
- ⑤ニューズレターを作成し研究情報の公開に備える。

【第2年度】(平成29年4月～30年3月)

- ①年度の前後乃至中間において研究打合せ会を開催し研究情報の交換と研究状況の確認を行う。
- ②研究資料の調査収集を継続する。
- ③各人研究テーマに添った研究を進める。
- ④数度の勉強会を開催する。
- ⑤ニューズレターを作成し研究情報の公開に備える。

【第3年度】(平成30年4月～31年3月)

- ①必要に応じ研究資料の補充調査収集を予定している。
- ②研究成果公表の一環としてシンポジウム等の開催を予定する。
- ③研究報告のまとめを行う。
- ④今後の共同研究の展開を図る。

編集後記



今年度から、本研究会は皇學館大学研究開発推進センターのプロジェクト研究に位置づけられ、皇室と災害支援事業に焦点を当てたテーマで新たな3か年がスタートしました。

また、今号から「近現代日本における『皇室と福祉事業』に関する研究会ニューズレター」と名称が変わりましたが、前号までと継続性を持たせながら今後も研究の成果をお伝えしていきます。

(金田)



近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会
ニューズレター
第3号

平成28年9月30日発行
発行 皇學館大学
現代日本社会学部
新田 均研究室©
〒516-8555
三重県伊勢市神田久志本町1704
0596-22-0201(代)